岩手大学教育学部研究年報　第48巻第1号（1988.10）155～167

シンデレラ・コンプレックスについての研究

藤　岡　秀　樹*

（1988年6月30日受理）

問　題

女性の自立を内から妨げているものをDowling（1981）は，シンデレラ・コンプレックス**（Cinderella Complex）と名付けた。童話の『シンデレラ物語』の主人公のシンデレラのように，苦労をしていてもいつかは素敵な王子様が登場するであろうと願望し，自分の人生を王子様にまかせ，守られたいという心理的状態のことである。

女性の自立を妨げているものは，外にあるのではなく，彼女自身の内面にあるという点がDowlingの主張の重要な点である。また，シンデレラ・コンプレックスは独身の女性だけでなく，既婚女性にも，離婚者にも，未亡人にも――自立を求めようとする全ての女性に存在するとDowlingは考えている。シンデレラ・コンプレックスは単なる玉の輿の結婚願望ではなく，依存願望，結婚幻想，成功回避，自信のなさ，依存と独立・自立との葛藤，責任回避などの特徴が複雑に混じりあったものである。

日本では落合（1984）が，Dowlingの叙述に基づき，シンデレラ・コンプレックス尺度を作成し，尺度の因子構造の検討や年齢・職業による差異，欲求や動機尺度との関係を調べている。因子分析の結果，①「自信のなさ・根なし草」因子，②「依存・女らしい存在でありたい」因子，③「責任回避」因子――の3つを抽出している。そして，「自信のなさ・根なし草」因子の因子得点は，30歳台後半まで年齢の上昇に伴い低下し，30歳台後半が最も自信のある，安定した時期で，その後，因子得点が高くなり，自信のなさ・根なし草感が強まることを見出している。欲求などの尺度との関係についての分析では，①3因子とも成功回避欲求と正相関の関係が，②「依存・女らしい存在でありたい」因子は達成欲求と正相関の，「自信のなさ・根なし草」因子は自立欲求と負相関の関係が，③「依存・女らしい存在でありたい」因子と「責任回避」因子は，女性役割尺度と正相関の関係がみられることがわかった。

青年期後期は自立の欲求が強まる時期であるが，女子青年においては，独立性と依存性は対立する両極概念ではないという知見（高橋，1968；加藤・高木，1980）が得られている。この時期の女子青年を対象としてシンデレラ・コンプレックスの内容を検討することは，独立性と依存性の関係を解明する有効な手がかりを与えてくれることになるだろう。

本研究では，落合（1984）の作成したシンデレラ・コンプレックス尺度を用いて，20歳前後の未婚女性にみられるシンデレラ・コンプレックスと諸欲求および性役割期待との関係を明らかにすることを目的とする。落合の作成した尺度の項目の中には，Dowlingの解釈とは少しニ

---

* 岩手大学教育学部

** Dowling の著書 "*The Cinderella Complex. Women's hidden fear of independence.*" の章の構成は次のようになっている。第1章『依存願望』第2章『退却の人生』第3章『「女らしさ」の表裏』第4章『娘たちを委えさせるもの』第5章『結婚幻想』第6章『ジェンダー・パニック』第7章『自立への飛翔』訳は柳瀬尚紀(訳)『全訳版シンデレラ・コンプレックス』による。

ュアンスが異なるものが含まれるので，一部修正して使用する。そのために3因子に分類せず当初，落合が抽出したシンデレラ・コンプレックスの3つの特徴――①依存心，②自信のなさ・根なし草感，③独立と依存との葛藤――に該当する項目を下位尺度として取り扱い，合計点をシンデレラ・コンプレックスの指標として処理を行う。

性役割期待についても，男性役割と女性役割の認知の仕方に差があるか――伝統的性役割観をもっている傾向が強いのかどうか――をみることができる測度を用いることにする。そして，自由記述法による「結婚」と「女性の労働」についての意識調査も行うことにする。

仮説として以下の3つをあげることができよう。

〔仮説1〕 シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者と比べて，『追従』欲求・『求護』欲求が強く，『達成』欲求・『自律』欲求が弱いであろう。

〔仮説2〕 シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者と比べて，性役割期待の認知において，男性と女性の役割認知のとらえ方に差異を大きくつけているであろう。換言すれば，伝統的性役割観を強くもっているであろう。

〔仮説3〕 「結婚」や「労働」についての意識調査においても，シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者よりも，性別役割分業意識を反映した回答を示すであろう。

方　法

1．被験者

岩手県内在住の17歳から24歳までの未婚女性136名に後述する質問紙を配布し，後日，回収を行ったところ，98名の回答を得ることができた（回収率72.1%）。本研究ではこの未婚女性98名を被験者とする。被験者の平均年齢は20.17歳であり，その内訳は，大学・短大生が48名，専門学校生が42名，高校生が1名，会社員が5名，無職が2名であった。

2．質問紙

(1) シンデレラ・コンプレックス尺度

Dowling（1981）の叙述に基づいて落合（1984）が作成した18項目からなるシンデレラ・コンプレックス尺度の中から，16項目を採用した。その内，2項目は文章表現を一部修正して用いた。下位項目の内訳は，「依存」項目が5，「自信のなさ・根なし草感」項目が6，「独立と依存との葛藤」項目が5である（付表1参照）。

評定は「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「まったくそう思わない」の6段階で行わせた。

(2) 欲求尺度

EPPS 性格検査（Edwards, 1954）の日本語版〔大学・一般用〕（肥田野ら（訳・編），1970）の質問文の中で，シンデレラ・コンプレックスの特徴と関連が深いと思われる欲求の特性を表わすものを取りあげた。その内訳は，『達成』欲求が9項目，『追従』欲求が3項目，『自律』欲求が6項目，『求護』欲求が3項目，『支配』欲求が3項目，『内罰』欲求が2項目，『持久』欲求が1項目である（付表2参照）。

各質問文を提示し，「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「まったくそう思わない」の6段階で評定を行わせた。なお，シンデレラ・コンプレックス尺度と欲求尺度の両者の項目を合わせてランダムに配列し，〔調

査1〕とした。

(3)　性役割期待尺度〔調査2〕

性役割期待尺度は，柏木（1972）によって作成されたものを用いた。これは，21項目の特性が，男性あるいは女性にとってどの程度望ましいのか，男女別に評定を行わせるものである。本研究では「最も望ましい」「非常に望ましい」「やや望ましい」「やや望ましくない」「非常に望ましくない」「最も望ましくない」の6段階*で評定を行わせた。

21項目の内訳は，男性役割次元として，①第Ⅰ因子（『知性』）項目が11，②第Ⅲ因子（『行動力』）項目が8，女性役割次元として，③第Ⅱ因子（『美と従順』）項目が8となっている(付表3参照)。各項目の差異得点〔＝男性評定値－女性評定値〕の合計を因子得点として算出する。

(4)　結婚および労働についての意識調査〔調査3〕

「女性にとって結婚とは」「女性が働くことについて」という質問を提示し，自由記述を求めた。

3．手続き

調査1～3からなる冊子を配布し，後日，回収を行うという留置法の形態をとった。調査は1987年10月から12月にかけて実施された。

結　果　と　考　察

1．シンデレラ・コンプレックス尺度の分析

シンデレラ・コンプレックス尺度の全項目に回答を行った93名の合計点の平均を求めたところ，平均は62.64，ＳＤは7.90であった。そこで，平均値より１ＳＤ以上得点が高い者（71点以上）をシンデレラ・コンプレックス（以下ＣＣと略す）得点上位群，１ＳＤ以上得点が低い者（54点以下）をＣＣ得点下位群，残りをＣＣ得点中位群として抽出した。３群の下位尺度別の得点を表１に示す。

３群間に得点の平均値に有意差がみられるかどうかＦ検定を行ったところ，３つの下位尺度と合計点の全てにおいて，１％水準で有意な群間差がみられた。多重比較の結果，ＣＣ得点上位

表１　各群のシンデレラ・コンプレックス得点の平均と標準偏差

	ＣＣ得点上位群 (N＝14)	ＣＣ得点中位群 (N＝65)	ＣＣ得点下位群 (N＝14)
『依　　存』項　目	24.64 (2.82)	19.97 (2.88)	15.71 (3.26)
『自信のなさ・根なし草感』項目	26.07 (2.58)	22.74 (3.02)	17.21 (3.69)
『独立と依存との葛藤』項目	23.29 (3.67)	19.57 (2.14)	16.71 (2.89)
合　　計	74.00 (2.75)	62.42 (4.11)	49.64 (5.56)

（　）内はＳＤ

* 柏木（1967，1972）の研究では「どちらともいえない」というニュートラルな評定段階を加えて７段階となっている。本研究ではニュートラルな評定に集中することを防ぐために，６段階評定を採用した。

群＞ＣＣ得点中位群＞ＣＣ得点下位群(いずれも各群間で１％水準で有意)の関係を見出した。

次に，３つの下位尺度間の内部相関を求めたところ（表２参照），r＝.30前後の低いが有意な正相関が得られた。このことは，３下位尺度の間に弱い結びつきがあることを意味するものである。

表２　シンデレラ・コンプレックス尺度の内部相関（N＝93）

	依　存	自信のなさ・根なし草感	独立と依存との葛藤
依　存		.291**	.292**
自信のなさ・根なし草感	.291**		.341**
独立と依存との葛藤	.292**	.341**	

**；p<.01

２．欲求尺度とシンデレラ・コンプレックス尺度との関係について

ＣＣ得点の上位群・中位群・下位群別に７つの欲求尺度の得点の平均と標準偏差を算出した。その結果を表３に示す。

表３　各群の欲求尺度得点の平均と標準偏差

	ＣＣ得点上位群（N＝14）	ＣＣ得点中位群（N＝61）	ＣＣ得点下位群（N＝14）	F 検定 df=2/86	多重比較
達　成	38.29 (6.46)	39.28 (5.05)	38.07 (6.12)	F=0.38 N　S	
追　従	11.50 (1.24)	11.34 (1.50)	10.00 (1.85)	F=4.67 *	上位群＞下位群** 中位群＞下位群**
自　律	25.00 (2.93)	23.92 (3.12)	22.86 (3.66)	F=1.53 N　S	
求　護	15.21 (2.04)	12.51 (2.16)	12.14 (1.85)	F=10.13 *　*	上位群＞下位群** 上位群＞中位群**
支　配	8.79 (3.78)	9.43 (2.18)	8.07 (2.58)	F=1.68 N　S	
内　罰	8.64 (1.67)	7.30 (1.67)	5.36 (2.02)	F=12.44 *　*	上位群＞下位群** 上位群＞中位群** 中位群＞下位群**
持　久	4.43 (0.73)	4.54 (0.88)	4.43 (0.73)	F=0.16 N　S	

（　）内はＳＤ　　*；p<.05　　**；p<.01

３群間に得点の平均値に有意差がみられるかどうかＦ検定を行ったところ，有意差がみられた欲求尺度は『追従』（p<.05)，『求護』（p<.01)，『内罰』（p<.01）の３項目であった。次に，多重比較を行ったところ，『追従』ではＣＣ得点上位群≒ＣＣ得点中位群＞ＣＣ得点下位群，『求護』ではＣＣ得点上位群＞ＣＣ得点中位群≒ＣＣ得点下位群，『内罰』ではＣＣ得点上位群＞ＣＣ得点中位群＞ＣＣ得点下位群――の関係が見出された。

いずれもＣＣ得点上位群は，ＣＣ得点下位群や中位群と比べて得点が高く，それらの欲求が強いということである。シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い者程，人に責任を任せるような責任回避の傾向や，困っている時には，他人に同情されたり援助を受けたりすることを好

み，依存的で自信がないという傾向が強いといえるだろう。

一方，有意差はみられなかったが，『自律』は，ＣＣ得点上位群の方がＣＣ得点下位群よりも高得点である。シンデレラ・コンプレックスは単に依存願望だけではなく，自律（あるいは独立）の欲求も強く，独立と依存との葛藤がみられると考えることが可能であろう。

『達成』は群間差がみられなかった。この点について少し考察を加えよう。EPPS 性格検査の『達成』欲求の質問文は，一般的な達成欲求あるいは達成動機をとらえようとしたものが多い（例えば“なにか非常に有意義なことをなしとげたい”“やりかけたことは，うまくやりとげたい”など)。女性をとりまく日常生活での具体的な場面（課題）を設定して達成欲求(達成動機）を尋ねたものではないので，群間差がみられなかったのかもしれない。落合（1984）の研究でもEPPSの『達成』尺度は，シンデレラ・コンプレックス尺度の３因子の内，第Ⅱ因子（「依存・女らしい存在でありたい」）とのみ低相関（$r=.21$）がみられたにすぎなかった。このことからも妥当な結果であるといえよう。

ところで，Dowling（1981）はシンデレラ・コンプレックスと成功回避動機（欲求）との関連性を論じており，落合（1984）の研究でも成功回避動機（Zuckerman & Allison（1976）の Fear of Success Scale を使用)とシンデレラ・コンプレックス尺度との有意な正相関($r=.17$～$.47$）を見出している。成功回避動機は，達成動機や失敗回避動機の枠組みでは考えられない比較的新しい概念*であるが，女子青年で強く見出される動機である（Horner，1972，1974)。達成行動を取りあげる際には，この成功回避動機を抜きにして考えることはできない。達成欲求の質問項目の内容吟味とともに，成功回避動機も指標に加えてシンデレラ・コンプレックスとの関係を調べることが，残された課題であるといえるだろう。

3．性役割期待尺度とシンデレラ・コンプレックス尺度との関係について

被験者全体の性役割期待尺度の因子得点の平均値を求めたところ，第Ⅰ因子（知性）は7.33（ＳＤ＝3.99)，第Ⅱ因子（美と従順）は－4.42（ＳＤ＝3.19)，第Ⅲ因子（行動力）は3.41（ＳＤ＝2.84）であった。因子得点の絶対値の大きさを比較すると，男性役割次元の第Ⅰ因子が最も大きく，次いで女性役割次元の第Ⅱ因子，そして男性役割次元の第Ⅲ因子の順となっており，性役割の識別に「知性」が最も有効なものとなっていることがわかる。ところが，柏木（1972）の女子大学生の結果では，因子得点の絶対値の大きさの順位は第Ⅲ因子＞第Ⅰ因子＞第Ⅱ因子となっており，差違がみられる。彼女の研究で収集されたデータは今から約20年程前のものであり，女性の社会進出や男女平等化の運動の発展によって，女子青年の性役割意識の変化が生じたため，この様な差違がみられたのかもしれない。この点については，もう少し多くのデータを収集して検討を行う必要があるので，ここでは，これ以上の言及は差し控えたい。

３群間に因子得点の平均値に有意差がみられるかどうかＦ検定を行ったところ（表４参照)，第Ⅰ因子（知性）と第Ⅲ因子（行動力）で有意な群間差がみられた（第Ⅰ因子：$F(2, 86)=5.15$，$p<.01$；第Ⅲ因子：$F(2, 86)=3.11$，$p<.05$)。そこで多重比較を行ったとこ

* 1960年代末に Horner によって提唱された概念である。達成行動において，多くの女子は成功した場合，周囲から社会的拒絶を受けたり，女らしくない行動だと批判されたりすることを心配して，成功に対する不安や恐れを持つことになる。達成動機が高い女子は低い女子と比べて，成功回避動機は高いと Horner は主張している。また，伝統的な女性役割を志向する女子は，そうでない者と比べて成功回避動機が高いという興味深い知見がある。　Alper, T.G. 1973 The relationship between role orientation and achievement motivation in college women. *Journal of Personality*, 41, 9-31.

表4　各群の性役割期待尺度得点の平均と標準偏差

	CC得点上位群 (N=14)	CC得点中位群 (N=61)	CC得点下位群 (N=14)	F検定 $df=2/86$	多重比較
第Ⅰ因子 (知性)	9.58 (5.12)	7.41 (3.65)	4.86 (3.04)	$F=5.15$ **	上位群>下位群** 上位群>中位群+ 中位群>下位群*
第Ⅲ因子 (行動力)	4.25 (2.49)	3.60 (2.94)	1.79 (2.08)	$F=3.11$ *	上位群>下位群* 中位群>下位群*
第Ⅱ因子 (美と従順)	−5.33 (2.36)	−4.38 (3.36)	−3.76 (2.96)	$F=0.86$ NS	

( )内はSD　*；$p<.05$　**；$p<.01$　+；$p<.10$

ろ，第Ⅰ因子ではCC得点上位群>CC得点下位群（$p<.01$），CC得点上位群>CC得点中位群（$p<.10$），CC得点中位群>CC得点下位群（$p<.05$）の関係が，第Ⅲ因子ではCC得点上位群>CC得点下位群（$p<.05$），CC得点中位群>CC得点下位群（$p<.05$）の関係が見出された。すなわち，シンデレラ・コンプレックス尺度の得点が高い者程，男性役割次元である「知性」と「行動力」の2つの因子において，男女間の性役割認知に差をつけたとらえ方をしていることになる。

一方，女性役割次元である「美と従順」因子では有意な群間差はみられなかったが，因子得点の絶対値は，CC得点上位群の方がCC得点中位群や下位群と比べて大きく，シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い者程，性役割期待に男女差をつけた認知をしている傾向がうかがわれる。

次に，性役割期待尺度の各項目の評定についての検討に移ろう。そこで，CC得点上位群とCC得点下位群の差異得点に有意差がみられるかどうか，t検定を行った。その結果，上位群と下位群の間に有意差がみられた項目は，「頭がよい」（上位群の差異得点0.64，下位群の差異得点0.07，$p<.01$）「学歴のある」（上位群0.57，下位群0.00，$p<.05$）「線の太い」（上位群1.36，下位群0.29，$p<.05$）「意志強固な」（上位群1.07，下位群0.43，$p<.05$）の4つであった。「意志強固な」は第Ⅲ因子（行動力）の項目であるが，他の3つは全て第Ⅰ因子（知性）の項目である。一方，有意な傾向差（$p<.10$）がみられた項目は，「理性的」（上位群0.50，下位群0.00）「政治に関心ある」（上位群0.43，下位群0.14）「背が高い」（上位群1.57，下位群0.86）「積極的」（上位群0.79，下位群0.36）の4つであった。「積極的」が第Ⅱ因子（美と従順）と第Ⅲ因子の共通項目であるのを除けば，他の3つは全て第Ⅰ因子の項目である。

有意差や傾向差がみられた項目の大半は，男性役割次元の中の第Ⅰ因子（知性）であるという点は興味深い。そして，いずれもCC得点上位群はCC得点下位群と比べて，性役割期待に関して男女差をつけた認知を行っている。また，2群間で性役割認知に有意差がみられた項目は，柏木（1972）の因子分析の結果では，比較的因子負荷量が高かった*(.42〜.59）という共通点をもっていることも特徴としてあげられよう。

* 柏木（1972）の因子分析での因子の解釈にあたっては，全般的に因子負荷量の値が小さい（各因子の負荷量の最大値は .57〜.59で，.40以上の負荷量を示す項目は12個のみ）ので，因子負荷量が .30以上を有効な項目として扱っている。そのため「背が高い」や「かわいい（逆転項目）」が『知性』の因子に含まれてしまっているので，因子構造は少しわかりづらくなっている。

4．結婚および労働についての意識調査の分析

「女性にとって結婚とは」「女性が働くことについて」の自由記述に回答を行った被験者（部分回答も含む）は80名で，全体の81.6%を占めていた。大学生の回答は，相対的に記述量が多かった。項目別に検討を行っていくことにしよう。

(1)　結婚について

全体を通してみると，幸福，憧れ，人生の転換期という意味の答えが圧倒的に多く，次いで精神的安定，親からの自立という答えが比較的目立っていた。

回答を詳しくみると，シンデレラ・コンプレックス傾向の強い群と弱い群では，記述内容に違いがみられる。ＣＣ得点上位群とＣＣ得点下位群の典型的な回答を紹介し，差異について考察を加えていくことにする（引用は原文のまま。ただし，文体は常体に統一した）。

〔CC得点上位群の回答例〕

- 第二の人生。よきパートナーにめぐまれればそれからの人生が，結婚前よりも二人分も幸せになれるのでは（大変な時もあるだろうが）ないだろうかと考える。（大学生22歳，ＣＣ得点76）
- 男性にとってもそうなのかもしれないが，自分一人では精神的にも経済的にも生きていくのはつらいこと。自分のすべてをうけとめてくれる人がいて自分も相手のすべてをうけいれてあげられて，お互いによりそって生活していくのが結婚だと思う。（大学生21歳，ＣＣ得点71）
- 女性として生まれてきたからには，男性に愛されてしあわせな結婚をしたいと思っている。結婚とは女性にとって最大のしあわせだと思う。恋人同士の時が一番しあわせだという人もいるけれど，私はまわりの誰からも祝福されての結婚が一番しあわせだと思うし，私自身もそんな結婚をしたいと思う。（専門学校生19歳，ＣＣ得点72）

ＣＣ得点中位群の内，上位群に近い高得点者にも，上位群の記述内容に類似したものがみられる。

〔CC得点中位群の中での高得点者の回答例〕

- 私は女性にとって結婚というものはとても大切なものというか，とてもあこがれるもの――夢だと思う。今は独身のまますごすとか言う人が多いけれども，私はやはり自分自身を必要としてくれる人，自分に必要な人――こういう人はやはり女性にはいるべきだと思う。こういう人がいることにより，仕事だけでなくいろいろなことにプラスになると思う。（専門学校生19歳，ＣＣ得点68）
- とても大切で素敵なことだと思う。幼い頃から結婚にはなんらかのあこがれをもっていたし，“結婚＝しあわせ”だと思っている。夢ばかりふくらんで現実がおいつけない今現在だが，いつか必ず私を理解してくれて田原俊彦様のようなかっこいいひとをさがしだしてウェディングベルをならしたいと思う。（専門学校生18歳，ＣＣ得点68）〔傍点は回答者〕

ＣＣ得点上位群や中位群の高得点者の叙述にみられる特徴は，Dowling（1981）のいう依存願望であり，結婚を“幸せ”（女性にとって一番の，最大のというニュアンスを含む）ととらえ，素敵な人（＝夫）の登場を待ちこがれているということである。結婚に対する見方は甘いトーンでつらぬかれたものが多い。

次に，ＣＣ得点下位群およびＣＣ得点中位群の中での低得点者の回答を紹介しよう。

〔CC得点下位群の回答例〕

- 女の人はどうせ結婚するからとか，結婚は逃げ道とか，最後の手段などと考えている人が男の人に多い

みたいだし，女の人にもいるようだ。でも私はこんな考えには賛成できない！ ある程度は自分の自由を失うことになるのだし，結婚や子育てというのはとても大変なことだと思う。自分の人生が変わるのだから簡単に考えるのはまちがいだと思う。（大学生22歳，ＣＣ得点22）

- 絶対にしなければいけないとは思わないが，結婚をすればある程度の安定が得られると思う。（中略）男性にとっても女性にとっても結婚がそれからの人生に与える影響は大きいと思う（いつ，どのような人を選ぶかは，その人次第だが……）。しかし，ただの“やすらぎの場”ではなく，自分で(二人で）創っていくものなのだから，それ相応の覚悟，責任を持つべきだと思う。（大学生23歳，ＣＣ得点54）
- 適齢期などという言葉があるが，結婚したい時が適齢期だと思うので，そんな言葉にとらわれず，したい時にするのが本当だと思うし，したくなければしなくていいと思う。結婚が全てという人生はつまらないし，そうなりたくない。（専門学校生19歳，ＣＣ得点52）

〔CC得点中位群の中での低得点者の回答例〕

- やはり人生を左右するものなので，重要なことだと思う。しかし，ただ夫のうしろにくっついていれば安心だと考えるのもつまらないので，結婚によってまた自分なりの新たな目標を立てて生きたい。結婚のメリットを有効に活用したい。（大学生22歳，ＣＣ得点56）
- 根本的には，男性にとっても女性にとっても結婚の意味は同じであると思いたい。それぞれの特性，考え方にもとずき，役割等を分担し，お互いにとって一番自然な形の家庭を築けばよいのではないだろうか。その場合でも，やはりお互いを信頼し，理解し，支えあうことが重要であろう。（大学生22歳，ＣＣ得点57）

ＣＣ得点下位群や中位群の低得点者の叙述の中には，上位群のように結婚を幸せや憧れとしてとらえたものも幾つかみられる。しかし，総じてＣＣ得点上位群とは対照的な特徴を見出すことができよう。それは，結婚について比較的クールにとらえているということである。夫にたよりきるような受動的な結婚を否定し，夫婦の相互理解や役割分担，互いの自由の保障をめざし，安易な結婚を避けたいという思いが感じられる。

(2) 女性の労働について

大多数の回答は，女性が働くことについては賛成であるというものであったが，結婚や育児の問題と関連づけると様々な意見が展開されていた。子どもができたら，一時仕事を休み，後に再開するという意見もあれば，仕事を辞めて育児に専念するという意見もあり，育児や家事と仕事の両立の困難さを指摘する意見も多かった。「結婚」についての記述と比べると，シンデレラ・コンプレックス傾向の強弱に関して，その叙述内容に際立った差異は見出し難いが，若干の違いを見つけることができる。まず，ＣＣ得点上位群と中位群の中での高得点者の回答を紹介しよう。

〔CC得点上位群の回答例〕

- 女性も男性と同じく能力がある。それを生かして働くことはとても自然であると思う。家のため，子供の教育費のため，主人のためでなく，自分の能力を生かすために働けたらすばらしいことであると思う。が，家事をおろそかにしてはいけないとも思う。夫や家族の理解が必要不可欠であると思う。（大学生22歳，ＣＣ得点74）
- 女性が自分の生きがいとして働くことはとてもよいことだと思う。しかし，家庭をもった場合，子供ができた場合などはとても問題が多くなると思う。まわりの協力を得られなければずっと続けて働らくことは難しいのではないかと思う。私としては女性が働くことはよいことだと思うし，がんばってほしい。“男性に負けないように”という意識はあまり必要ないと思うから，自分なりに充実した仕事がで

きればいいと思う。（大学生22歳，ＣＣ得点72）

・その人の考え方で働いていても働かなくても別にかまわないと思う。でも，私はあまり働きたくない。まして結婚してからは絶対家庭に入りたい。仕事も家事も両方完璧にこなすのはムリだと思うから。家族のことを考えたら家事に専念すべきだと思う。（大学生21歳，ＣＣ得点71）

〔CC得点中位群の中での高得点者の回答例〕

・特に独身の時は，どんどん自分のやりたい仕事をやってよいと思う。（中略）また，結婚してからは，やはり家庭というものがあるので家庭のことをきちんとできない人には，仕事をやる資格はないと思う。そこらへんは，夫と協力しあうことも大切だが，一つの家庭をも守れずに社会の中へなど入ってやっていけるはずがない。（専門学校生18歳，ＣＣ得点70）

ＣＣ得点上位群や中位群の高得点者の叙述にみられる特徴は，働くことに対して全く傍観者的立場に立つ回答（「活躍してもらいたい」「がんばってほしい」など）がみられることと性別役割分業意識を強く持ち，働くための条件に制限をつけているということである。さらに，ＣＣ得点上位群の中には，自分は（なるべく）働きたくないという意見が２例あった。他群にはこの様な意見はなく，興味深い結果となっている。

次にＣＣ得点下位群と中位群の低得点者の叙述をとりあげよう。

〔CC得点下位群の回答例〕

・女性でも男性でも生活していかねばならないのだから，仕事をもつことは必要だと思う。しかし昔と違って，ある程度職種も増え，自分で選ぶこともできるようになり，仕事に対する充実度も大きくなってきたのではないかと思う。女性が仕事をしたい，自分の能力を試してみたいと思うようになったのだと思う。ただ，これに結婚の問題が加わると難しくなると思う。家事・育児は女性の分野だったのだから……。“男性と同じなのだから働くべきだ”とも“女性は結婚するのが一番の幸せ”とも言わない。これは本人の仕事に対する意識の持ち方だと思う。（大学生23歳，ＣＣ得点54）

・これからはどんどん女性が働く時代だと思う。（中略）結婚してもできれば専業主婦を避けて，仕事に就いていたい。ある程度の犠牲が必要かもしれないけれど，それ以上に働いている方が大事なような気がする。家庭と仕事の両立はむずかしいかもしれない。しかし，現に今やっている人が大勢いるのだし，それなりにすごしているのだから，私は仕事をしていきたいし，家庭も大切にしたい。女性が働くことは女性に必要なことであり，財産だと思う。（専門学校生18歳，ＣＣ得点54）

〔CC得点中位群の中での低得点者の回答例〕

・女性は働くか，働かないで家庭に入るかどっちか自分の好きなほうを選べるのでたいへんラッキーだと思う。ただ，働く女性は，女であることからくる甘えを捨てることが必要だ。家庭に入る女性はそれに十分甘えることができるかわりに社会からとり残されたような存在になりそうだ。（大学生22歳，ＣＣ得点56）

・女性だから，男性だからという区別はしたくない。しかし，女性の場合，自分自身「女だから」という否定的な自覚で無責任，無目的で働く女性も少なからず存在するのは残念である。また，母性の関係上，子供のことなどが関係すると，社会的就労はなかなか大変ではあるが，負い目に感じることなく，むしろ誇りをもって努力したいと思う。（大学生22歳，ＣＣ得点57）

ＣＣ得点下位群や中位群の低得点者の叙述にみられる特徴は，仕事（労働）と家事や育児を対立的にとらえたり，二者択一の問題として考えたりはしていないという点である。若干の犠牲や困難を克服するよう努力し，夫や家族の協力と理解を求めようとしている。性別役割共業

意識を持っていると感じられる回答もみられた。環境や制度の整備の必要性を主張した回答も少数だが存在したが，いわゆる「ウーマン・リブ」運動的立場からの意見は皆無であった。

1970年代前半と同後半の性別役割意識調査の結果*の検討を行った神田(1980) は，性別役割分業意識の減少が共業意識の増加に直接，結びつくのではなく，不確定意識と共業意識の両者の増加をもたらし，3つの意識に分化する傾向がみられるようになったと結論づけている。本研究の被験者の回答に多くみられた“育児のための中断・再就職志向”は，不確定意識層に多いと神田は見出している。現状対応的な傾向が強まると，再就職は困難になり，家庭志向が強くなり，現状肯定になってしまいがちである。真の意味での問題解決のためには，就業役割を中心とした女性自身の学習が必要だといえるだろう。5年後，10年後に本研究の被験者に対して追跡調査を行い，結婚や労働に対する意識の変化の分析をすることが，必要だと思われる。

全体を通してみると，シンデレラ・コンプレックスの傾向の強い者は弱い者と比べて，性別役割分業意識が強いという傾向がうかがわれる。典型的な回答を寄せた被験者に対して，男女の平等意識や生活感情，生き方などについての面接調査を行い，彼女たちの意識を明らかにすることが残された課題であろう。

5．まとめ

17歳から24歳までの未婚女性98名を被験者として，Dowling（1981）のいうシンデレラ・コンプレックスを測る尺度と諸欲求や性役割期待との関係を調べた。得られた結果は以下の通りである。

① シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群は弱い群と比べて，『追従』『求護』『内罰』欲求が強かった。一方，『達成』欲求については群間差はみられなかった。また，『自律』欲求では，統計的な有意差はみられなかったが，シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群の方が得点が高かった。よって〔仮説1〕は部分的に支持された。

② シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群は弱い群と比べて，男性役割次元である「知性」と「行動力」の因子において，男女間の性役割認知により差をつけたとらえ方をしていた。換言すれば，シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群の方が，伝統的性役割観を強くもっているということになり，〔仮説2〕は支持された。

③ 「結婚」についての自由記述の分析では，シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群では，結婚を“幸せ”としてとらえ，依存願望が強く現れた回答が目立ったのに対して，シンデレラ・コンプレックスの傾向が弱い群では，結婚を比較的クールにみつめ，夫婦の相互理解や役割分担を求めたいとする回答が多かった。

「女性の労働」についての自由記述の分析では，シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い群では，性別役割分業意識（女は家庭，男は仕事）が強く現れた回答や傍観者的立場に立つ回答が目立ったのに対して，シンデレラ・コンプレックスの傾向が弱い群では，労働と家事・育児を対立的にとらえず，夫の協力・理解を求めようとする，性別役割共業意識を示すような回答が散見した。よって〔仮説3〕は支持された。

---

* 1972年に総理府が行った調査では，性別役割分業を肯定する分業意識が83.2%を占めていたが，1976年（国際婦人年の翌年）になると，分業意識は48.8%と半数に減少し，分業を否定する共業意識が39.9%を示していた。神田らの調査（1978～1979年実施）では，総合的性役割意識に関しては，共業意識が36.4%，分業意識が15.3%，不確定意識が46.0%であった（神田，1980)。

最後に残された課題について述べよう。シンデレラ・コンプレックスとほぼ同時期に流行した概念に“ピーターパン・シンドローム（Peter Pan Syndrome)”（Kiley, 1983）がある。これは，シンデレラ・コンプレックスの男性版として考えられている概念である（関，1985；小田，1987)。その特徴として，①感情麻痺，②怠惰，③社会的不能症，④思考の魔術，⑤母親へのとらわれ，⑥父親へのこだわり，⑦セックスに対するコンプレックス――の7つがあげられる。思春期には性役割の葛藤として，青年期後期には自己愛と男尊女卑志向（chauvinism）として症状がでてくるとされている。甘えや依存という点では，シンデレラ・コンプレックスとよく似ている。ピーターパン・シンドロームの傾向の強い男子青年と弱い男子青年を被験者としてシンデレラ・コンプレックスの特徴がどの程度みられるか検討することと，ピーターパン・シンドロームとシンデレラ・コンプレックスの共通点と差異点を明らかにすることが，今後の課題であろう。

〔付　記〕　本研究は1988年3月岩手大学教育学部卒業の千田たまき氏（現　二戸市立川代小学校勤務）の卒業論文を藤岡が再分析・加筆したものである。データの収集および処理の一部を行っていただいた千田たまき氏に感謝の意を表します。

文　献

Dowling, C. 1981 *The Cinderella Complex. Women's hidden fear of independence.*（柳瀬尚紀（訳）　1986　全訳版　シンデレラ・コンプレックス　三笠書房）

Edwards, A.L. 1954 *Edwards Personal Preference Schedule.*（肥田野直・岩原信九郎・岩脇三良・杉村健・福原真知子（訳・編）　1970 EPPS 性格検査手引　日本文化科学社）

Horner, M.S. 1972 The motive to avoid success and changing aspirations of women. In J.M. Bardwick (Ed.) *Reading on the psychology of women.* Harper & Row.

Horner, M.S. 1974 The measurement and behavioral implications of fear of success in women. In J.W. Atkinson & J.O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement.* Winston & Sons.

神田道子　1980　女性の性役割意識―婦人問題解決のための学習の基礎として―　東洋大学文学部紀要 **34**, 教育学科・教職課程編　Ⅵ　39―59.

Kiley, D. 1983 *The Peter Pan Syndrome.*（小此木啓吾（訳）　1984　ピーター・パン・シンドローム　祥伝社）

柏木恵子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究　**15**, 193―202.

柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究　**20**, 48―59.

加藤隆勝・高木秀明　1980　青年期における独立意識の発達と自己概念　教育心理学研究　**28**, 336―340.

落合幸子　1984　人生の転換期の心理Ⅳ―女性の中のシンデレラ・コンプレックス―　常葉学園大学研究紀要　教育学部　**5**, 117―125.

小田　晋　1987　男の甘えと女の甘え　青年心理　**66**, 46―51.

関　計夫　1985　コンプレックス　金子書房.

高橋恵子　1968　女子青年における依存性の発達　依田新（編）　現代青年の人格形成　Pp. 21―44. 金子書房.

Zuckerman, M. & Allison, S.N. 1976 An objective measure of fear of success : Construction and validation. *Journal of Personality Assessment*, **40**, 422―430.

付表1　シンデレラ・コンプレックス尺度

A．『依存』項目
1．他の人から守られている存在でありたいと思う。
2．困難にぶつかるたびに男性の助けを求めたいと思う。
3．寄りかかれるような相手が欲しい。
4．男性の前では女らしい存在でありたい。
5．女性には，面倒をみてくれる人がいると思う。

B．『自信のなさ・根なし草感』項目
6．自分では何もできないと感じることがある。
7．私は自分を過小評価する傾向があると思う。
8．自分の中にいつもびくびく頼りないものを感じる。
9．「任せてください」と言いきれないところがある。
10．心の支えを失い，根なし草のような自分を感じることがある。
11．責任のあることを引き受けるのは苦手である。

C．『独立と依存との葛藤』項目
12．他の人に頼ろうとする自分がいやになることがある。
13．社会的に認められたいと思うがいざとなると恐い。
14．自分は自由を望んでいるが，感情的にはふっきれない。
15．仕事をバリバリやりたいが，女らしくないと思われるのもいやだ。
16．自由でありたいと思う一方で，守られていたいと思う。

付表2　欲　求　尺　度

A．達　成
1．なにか非常に有意義なことをなしとげたい。
2．将来，職業または専門の分野で第一人者になりたい。
3．立派な小説やすぐれた脚本を書いてみたい。
4．むずかしい仕事を，うまくやりとげたと言えるようになりたい。
5．他の人にはむずかしいようなパズルや問題を解いてみたい。
6．ものごとは，他の人よりじょうずにやりたい。
7．技能や努力が必要であると，一般に考えられている仕事をなしとげたい。
8．やりかけたことは，うまくやりとげたい。
9．何でも手がけたことには，最善をつくしたい。

B．追　従
1．人の指示に従い，人から期待されていることをしたい。
2．計画を立てるとき立派な意見をもっている人の指示を受けたい。
3．グループ活動で何をするか決めるときは，誰か他の人の意見に従いたい。

C．自　律
1．自分の思いどおりに行動できるようになりたい。
2．何かやりたいときは，他人に頼らず，自分の判断で決めたい。
3．権力をもっている人のことを批判したい。
4．自分がやりたいと思うことを，自由に行いたい。
5．責任や義務はさけたい。
6．他人の考えにこだわらず，自分の考えどおりにしたい。

D．求　護
1．困っているとき，友だちから同情され，理解してもらいたい。
2．困っているときは，友だちに助けてもらいたい．
3．友だちから，ちょっとしたかずかずの好意を気持ちよく示してもらいたい。

E．支　配
1．自分の所属している集団のリーダー格になりたい。
2．グループ活動の決定は，自分がやりたい。
3．人を説得して，自分がやりたいと思っていることをやらせたい。

F．内　罰
1．多くの点で，人にひけめを感ずる。
2．自分には，いろいろな場面を切り抜ける力がないのでゆううつになる。

G．持　久
1．結果がどうなるかわからなくても，やり始めた仕事や問題と，さいごまで取り組みたい。

付表3　性役割期待尺度

A．男性役割次元			
第Ⅰ因子（知性）			
1．頭がよい	2．学歴のある	3．理性的	4．政治に関心ある
5．線の太い	6．かわいい*	7．指導力のある	8．気持のこまやかな*
9．背が高い	10．謙遜な*	11．仕事に専心的	
第Ⅲ因子（行動力）			
1．経済力のある	2．意志強固な	3．活発な	4．積極的
5．仕事に専心的	6．視野の広い	7．自信のある	8．忍耐強い*
B．女性役割次元			
第Ⅱ因子（美と従順）			
1．従順な	2．謙遜な	3．男性に依存的	4．容貌の美しい
5．かわいい	6．気持のこまやかな	7．仕事に専心的*	8．積極的

＊は逆転項目